

レタスビッグベイン病の発病を抑制するカラシナの適正すき込み量の検証

カラシナすき込みによるレタスビッグベイン病の発病抑制効果向上を目的に、カラシナのすき込み量と防除効果の関係を検討した。結果、10a当たり3t以上のすき込み量を確保することで、発病抑制効果が認められた。

内 容

レタス栽培前にカラシナ1.6tをすき込むとビッグベイン病に対して生育初期の発病抑制効果がみられた（本誌 - No.216）が、すき込み量を増量することで、発病抑制効果が向上するのではないかと考えられた。そこで、カラシナのすき込み量と防除効果について、検討した。

試験は、2021年に発病汚染土壌を充填した大型プランターで行った。緑肥作物のカラシナ「地力」は、別圃場^ほで栽培し、十分な生育量が確保できた時点で、収穫・細断を行い、7月14日に10a当たり1t、3t、5t相当量をプランターに投入し、すき込んだ。試験区は、無処理を含め4区とした。その後、無被覆^りで放置し、11月7日に罹病性品種「レガシー」を定植し、経時的に発病を調査した。

その結果、12月中旬に初発を確認し、経時的に発病株率は全区で上昇したが、カラシナすき込み区は、無処理区より低い傾向にあり、1月14日でもすき込み量5t/10a区で最も低かつ

た（図1）。また、発病度^{*1}から算出した防除価^{*2}はすき込み量が増えるほど上昇し、3t/10a区及び5t/10a区では30以上^{*3}となり、被害軽減効果がみられた（図2）。

以上の結果から、カラシナのすき込み量は3t/10a以上が必要であると考えられた。

今後の方針

カラシナのすき込み量3t/10a以上を確保するため、今後は、カラシナの栽培方法（播種時期、播種量、施肥量等）について、検討していく。

※1 発病度 = $\{ (3A + 2B + C) / (\text{調査株数} \times 3) \} \times 100$

A: 重症株（葉脈付近が太く顕著に退色）、B: 中症株（葉脈付近が退色）、C: 軽症株（葉脈付近が薄く退色）、D: 発病なし

※2 防除価 = $100 - (\text{処理区の発病度} / \text{無処理区の発病度}) \times 100$

※3 農業の効果試験において、難防除病害における判定は防除価21以上で効果があるとされている。この試験では普及性を考慮し、防除価30以上を基準に評価している。

川口 藍乃（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

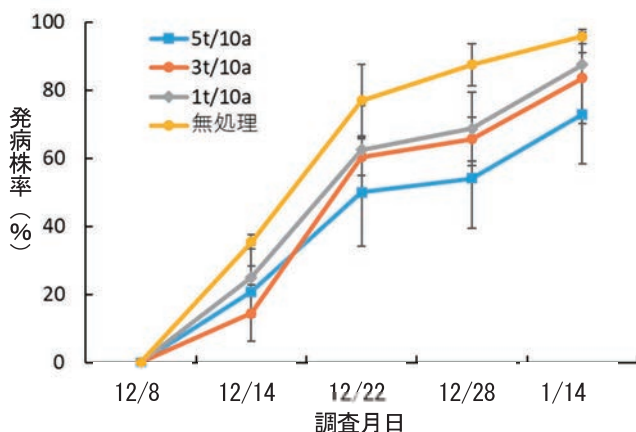


図1 各試験区の発病株率の推移



図2 カラシナすき込み量の違いによるレタスビッグベイン病の被害軽減効果（調査日：1月14日）